朝の柔らかな陽光が、学院の白い大理石の廊下を静かに染め上げていた。
その光は、磨き上げられた床面に淡い黒色の帯を描き、歩くたびに凛の小さな靴音が軽く響いては、すぐに吸い込まれるように消えていく。

白峰凛は、黒髪をきっちりと高く結い上げたポニーテールが背中で軽やかに揺れるその感触を、まるで自分の優位性を確かめるかのように意識しながら、
そして、自分の領地を巡回する女王のようにゆっくりと進みながら、制服のブレザーの裾を指先で丁寧に整え、ゆっくりと歩みを進めていた。

紺色のブレザーは彼女の細い肩をすっきりと包み込み、下に着た白いブラウスが、控えめな胸の膨らみを静かに強調していた。バスト 75 という数字は、凛にとって決して満足できるものではなかった。もっと豊かに育っていれば、背の低さを少しでもカバーできるのに……と、何度も鏡の前で唇を噛んだ記憶がある。
それでも、ブレザーの下で細くくびれたウエスト 51 のラインは、彼女の体をまるで陶器のように華奢に見せ、膝上丈のプリーツスカートから伸びる脚は、すらりと白く、どこか頼りなく細かった。
ヒップ 78 は小柄な体躯のわりにわずかな丸みを持っており、スカートの布地を優しく押し上げている。
145 センチという小柄な体躯がもたらす独特の歩幅の短さ。
すべてが、彼女の胸の内で複雑に絡み合う感情を、ねっとりと呼び起こしていた。

しかし、その小さな体に宿る強気な意志だけは、誰にも負けないと信じていた。

（背が低いなんて、ただの欠点じゃないわ……。
みんなが上から私を見下ろすような目をするたび、腹の底が煮えくり返る。
でも、それでいい。私は白峰家の娘。代々続く退魔師の血を引く、選ばれた存在。
背の低さも、華奢な体型も、ただの外見。
本当の価値は、家柄と素質と、この完璧なプライドにあるんだから）

凛は唇をきつく結び、視線を前方に固定した。
彼女は内心でそう繰り返しながら、意図的に足音を少し強く響かせた。
廊下を行き交う生徒たちの視線が、ほんのわずかに自分へと集まるのを感じ取り、凛は顎をわずかに上げ、冷ややかな視線を周囲に投げかけた。誰もがすぐに目を逸らす。
その瞬間、彼女の唇の端に、満足げな小さな弧が浮かんだ。
これが当然の風景であり、自分が学院の中で特別な位置にいることを、改めて実感させる瞬間だった。

朝のホームルームが終わると、凛は教官室へと足を向けた。
今日は待ちに待った初の実戦任務の日。
これまで座学と基礎訓練ばかりで、実戦経験など一度もない。
それが彼女の胸の奥に、じりじりと燻る苛立ちを生んでいた。
周囲からは「白峰の娘だから点数が高いだけ」「実戦に出たらどうなるか、見ものだわ」といった陰口が聞こえてくることもあったが、凛はそれをすべて知りながら、敢えて無視してきた。
身の程を深く知っているからこそ、今日という日を、まるで自分の価値を証明するための舞台のように待ち望んでいたのだ。

教官室の扉をノックもせずに開けると、中では佐伯教官が机に向かって書類を整理していた。四十代半ばの厳格な顔立ちをした男は、凛の姿を認めるとわずかに眉を寄せ、ゆっくりと顔を上げた。

凛は背筋を伸ばし、胸を張るようにして教官の前に立った。
控えめな膨らみがブレザーの下でわずかに強調されるのを意識しながらも、今はそんな自分の体型のことなどどうでもよかった。
ただ、今日という日を、完璧に自分のものにすることだけを考えていた。

「白峰。予定通りだな。今日は君に、初の実戦任務を任せる」

教官の声は低く、どこか重みがあった。
凛はすぐに、自信に満ちた笑みを浮かべながら答えた。

「はい。どんな下級淫魔でも、私にお任せください。すぐに片付けて戻ります」

佐伯は一瞬、目を細めた。
その視線に、凛はほんのわずかな違和感を覚えたが、すぐに心の中でそれを振り払った。
教官など、ただの年寄りの杞憂を並べるだけの存在。

自分は白峰凛であり、血筋が、素質が、すべてを裏付けている。
処女であることも、むしろ彼女にとっては誇りそのものだった。
まだ誰にも触れられたことのない純潔の身体を、淫魔などという下賤な存在に穢されるなど、想像しただけで吐き気がする。そんなことは絶対に起こり得ない。

教官は書類を一枚、ゆっくりと差し出した。
「森の奥、廃墟となった古い祠の周辺だ。出現が確認されたのは、芋虫系の淫魔。

教科書に載っている最低ランクの下級種であり、知能は低く、本能だけで動くらしい。
お前のお札と小太刀でも十分対応できるはずだ」

凛は書類に視線を落とし、内容を素早く目で追った。

「なにこれ……芋虫……？」

粘液を分泌し、無数の触手状の器官で獲物を絡め取り、孕ませる能力を持つという記述。
しかし攻撃力は低く、動きも緩慢。
学院の教科書では「一年生でも即座に浄化可能」と明記されている。
彼女は書類を手に取りながら、口元に薄く勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「芋虫……ですか。本当に、そんな下等なものでいいんですか？
もっと手応えのある相手でも構わないんですけど……本当に、私がこれを担当するんですか？」

言葉の最後が、わざとらしく尾を引く。
まるで、教官の提案を試すように、からかうように。
彼女の黒い瞳は佐伯をまっすぐ見据え、長い睫毛が一度ゆっくりと瞬く。

佐伯は深いため息をつき、革張りの背もたれが、きしりと小さな音を立てる。
彼の視線は凛の顔から一瞬も逸らさず、その奥には疲れたような諦めの色が浮かんでいた。
吐いたため息が、ゆっくりと肺の底へと引き戻されていく。

「過信は禁物だといつも言っているだろう。どんな雑魚でも、油断すれば命取りになる。
それに、君はまだ実戦経験がない。まあ、……まずはこれで経験を積んだらどうだ」

声は低く、抑揚を抑えたものだったが、そこに込められた重みは、部屋全体を包み込む。

（油断？……ふざけないで。私が油断なんてするわけがないでしょう？
この私が、教科書レベルの雑魚に負けるはずがないんだから）

凛は心の中で嘲笑を浮かべながら、教官の言葉を素直に聞き流した。
そんな忠告など、ただの形式的な台詞に過ぎない。
彼女は軽く頭を下げ、教官室を後にした。
廊下に出ると、数人の同級生がすぐに近づいてきた。

彼女たちはまるで待ち構えていたかのように、足音を揃えて凛の周りを囲むように集まり、視線を一斉に注いでくる。
その中でも特に背の高い少女。名前はなんだったか、
一歩前に出て、にやにやとした笑みを深く浮かべながら、わざとらしく声を張り上げた。

「凛ちゃ～ん、今日が初任務なんだって？
聞いたよ、芋虫淫魔……なんでしょ？がんばってね～。
あっはは、背が低いから芋虫になんかに絡まれたらす～ぐ捕まっちゃうかもよ？」

彼女の声はわざと甘く伸びるように響き、廊下の壁に反響して凛の耳にねっとりと絡みつく。
彼女は身長170センチ近くある体を少し前屈みにし、凛の顔を覗き込むようにして笑った。
その視線は上から下まで、ゆっくりと凛の全身をなぞるように動き、まるで「こんなに小さくて可愛い子が、本当に戦えるのかしら？」と無言で語っているようだった。

周りの少女たちもつられるようにくすくすと笑いを漏らし、互いに目配せを交わす。
その笑い声が、凛の胸に鋭い棘のように刺さった。
背の低さを指摘されるたび、彼女のプライドは激しく揺さぶられる。
しかし凛は表情を一瞬たりとも崩さず、冷ややかな笑みを返した。

「心配ご無用。あんなキモい芋虫の分際で、私を捕まえられるわけがないでしょう？
すぐに浄化してひっ捕まえて、持ち帰ってやるわよ。
ああ……、あんたたちにも、特別にご馳走してあげますから、楽しみに待っててね」

凛の声は静かだが、鋭く澄んでいた。
言葉の一つ一つに、抑えきれない優越感と苛立ちが混じり、廊下の空気を微かに震わせる。

「へえ～、強気だねぇ。でもさ、芋虫って触手がいっぱい伸びてくるんでしょ？
凛ちゃんみたいに小柄だと、すぐ絡め取られちゃうんじゃない？
まあ私だったら背が高いから、簡単に避けられるけどねえ～」

その言葉が、凛の胸に深く突き刺さった。
「小柄」という単語が、まるで刃のように彼女のプライドを切り裂く。
凛は指先を無意識に握りしめ、爪が掌に食い込む痛みを無視しながら、視線を彼女の目元に固定した。
心臓が速さを増す。それは怒りでも、屈辱でもあったが、同時に、今日の任務で必ず証明してやるとの決意でもあった。

同級生たちは顔を見合わせてくすくすと笑ったが、凛はもう相手にせず、踵を返して学院の正門へと向かった。

外に出ると、初夏の風が頬を優しく撫で、木々の香りを運んでくる。
凛は肩に背負った学生リュックを、軽く揺らしながら歩を進めた。
学院指定の紺色のリュックは、彼女の小さな背中に対して少し大きめに感じられるが、それが逆に「本格的な任務に出る自分」を実感させてくれる。
背負い紐が肩に食い込む感触が、心地よい緊張を呼び起こす。

リュックの重みが、背中全体にずっしりと伝わってくる。
中にはただの予備のお札や水筒だけではない。
教官から渡された地図の折り畳み版、森の奥で迷わないためのコンパス、簡易的な応急処置キット、そして念のため持ってきた栄養バーと小さな水筒。
そして、一本の小太刀。予備として、学院の教官が「万一に備えて」と押し付けたただの小太刀だ。
何の思い入れもない。
さらに、学院のルールで義務付けられている「緊急帰還用」の護符一枚と、予備の予備の予備のお札が、丁寧に仕切られたポケットに詰め込まれている。
すべてが、彼女の「エリート」としての自負を象徴する道具たちだ。

腰に差した小太刀の柄にそっと手をやり、彼女は確かめるように指を滑らせた。
日本刀は重すぎて使いこなせなかったが、この特注の小太刀は彼女の体格にぴったりと合った軽やかな刃物だ。
刃渡り四十センチ。美しく、鋭く、そして何より自分に相応しい武器。
懐に収めたお札の束も、指先で軽く確認する。

（……さすがに詰め込みすぎたかな……、このリュック。
でも、最初の任務なんだしこれくらいしても……、まあ、どうせ不要だろうけど。
地図を見ながら進むのも、絆創膏を貼る必要なんてないはずだけど、
万一の備えは、完璧にしておくのも大事よね）

ポニーテールが風に揺れ、黒髪が陽光を跳ね返す。
リュックの重みと、小太刀の柄の冷たい感触が、彼女の胸に静かな闘志を灯し続けていた。
森の入り口が近づくにつれ、リュックの中の地図が、かすかに音を立てて彼女を導くように思えた。
森への道は、舗装された街道から外れるにつれて次第に木々が密集し、陽光が木漏れ日となって地面にまだらな模様を描いていた。

凛は一人で歩きながら、胸の内で繰り返し繰り返し、自分自身に言い聞かせていた。

（私はエリートなの。
白峰家の娘。こんな下級淫魔ごときで、私の実力を測られるなんておかしいわ。
……でも、ちょうどいい。今日ここで、誰にも文句を言わせない完璧な勝利を収めてやる。
そうすれば、みんなが私の本当の価値を、ようやく認めるしかないんだから）

彼女の足取りは軽やかで、背の低さを忘れさせるほどに自信に満ちていた。
スカートの裾が風に揺れるたび、細く白い太ももがわずかに覗き、未熟でありながら張りのある肢体が、陽光の中で静かに輝いていた。
まだ誰にも触れられたことのない、純潔そのものの身体。
凛はそれを、心の底から誇りに思っていた。
淫魔などという下賤な存在が、近づくことすら許されない。
そんなことは、絶対に、絶対に、あり得ないのだから――。